
能力名は T.N.K.

ひょうきん者によろしく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

能力名は T・N・K・

【Nコード】

N7727X

【作者名】

ひょうきん者によるしく

【あらすじ】

これは、21世紀に超能力が普及しているっていう設定のお話……なんてあってもイマどき見向きもしないかもネ。さて、紹介続けるから帰らないでね……能力が未発現な田中は、その上、人格的な問題で周囲から浮いてしまっていた高校生男子、見兼ねた教師の言葉に愕然として、自分自身をよく見て、なおしていこうとする。とにかく、

ば

わかる！

え？ 超能力モノの主人公って、大概がクールでキザで、性格も普通だろって？

そんなことない、そんなことない。

さて、この小説には、そんな能力アリなの？ 審査員呼んじやうよ？ な能力が

登場しちゃうけれども、怒らずに、保温設定の給水機並みの目でご覧ください。

そして、ようやく、主人公に、超能力者予備群としての兆しが見えたようです。

No.1:プロローグ、まあ、中心人物の紹介(たぶん)(前書き)

はじめに。

僕の小説(未満もとい妄想)は「なんでこんな主人公はいないんだ
ろう」が出发点です。

とりあえず、

読めば

わかる！

No.1：プロローグ、まあ、中心人物の紹介（たぶん）

21世紀日本には、あるものが、一般的に普及していた。

「提出物、出してねえ！」

机についた少年の隣りを誰かが通り過ぎていった。

いや、何か黒い影が、一瞬みえた。

ほら、エレベーターの扉が開いた一瞬に、あるいは、ふと部屋の隅に一瞬見えて、気のせいで済ませる、アレ。

あ、わかんない人はスルーしていいよ。

ボ。

前方に炎があがった。

「こら、教室は火気厳禁。」

すかさず、教員が注意をする。

「すみません。……俺は、こいつのが伸びてきたからイギリス式のバーバーをしてやろうとしただけなのに。」

彼の指先で炎が揺れていた。

「絶対、根に持ってるだろ。」

された側はそうも思わないらしい。

事実、耳の産毛どころか、首から上が焼き鳥になってただろう。さて、ここでこの話の中心人物はというと。

……少し巻き戻してみよう。　じいじいじいじいじい……。

「絶対……」　もっと前。
びゅうううう。

「……からイギリス式のバーバーを……」　もおちよい。
机についた少年の隣りを誰かが通り過ぎていった。

ストップ。ココ、ココ。

いや、速い彼のほうじゃないよ。
誰って。

そこに座ってるヤツ。

通称　田中。

成績中くらい。

……に、しがみついてるカンジ。
体力平均。

……下。

彼のクラスには

電気出したり、発火しちゃったり、メチャクチャ速い、タリラリラ
ーなパパの後輩の息子さんみたいなのもいる。

何って、いわゆる、超能力。

それは一般的なものであつて、ほかにもいるよ。
さて、先ほどの彼はというと。

通称　田中。

能力　未発現。

……。

あ、つまり、ない、てことなんだよね。

それだけならいいけど、彼は精神的なところが、幼稚なんだよね。劣等感持っちゃってさ、色んなものを捻じ曲げて解釈してしまうようになってたんだよね。

目の前の微笑みを嘲笑ととらえたり。

目を見てわかる人って、すごいことなのに、半人前でそれをして、何も見えないのに、「こいつは裏で何考えてんだ」て、疑ったり。

イタイひと。近寄りがたい変人。そうなっちゃったんだね。

それを見かねた去年の担任の先生は、彼に教えた。

木を見ずに、森を見る。

お前は優しい、けど思いやりが足りない。

自分を見つめろ、そして自分で考えて、自分を創っていけ。

彼は衝撃を受けた。

その日から、彼の雰囲気は刺々しさが少しだけなくなった。

...

今日は 俺の誕生日だ。

俺は昨日のテレビの内容を思い出した。

それは、真面目なバスの運転手のおっちゃんが、いきなり演奏したサックス奏者の客や道を塞ぐデモ行進にハラハラするが、乗客の一人が自分の誕生日の歌を歌い出したところでサプライズだとわかり、笑顔をみせるというものだった。

「悪くないね。」

ハハハハ……。つい思い出すと笑いを漏らさずにはられない。

見てるこちらにも幸せになったのを覚えている。
……さて、帰るとするか。

ポン。

！

ハッピーバースデー トゥーユー。 ハッピーバースデー トゥーユー。
！。

ん？ なんだなんだ。
どこのやつか知らんが俺までウキウキするな。

コト。

目の前に掌サイズのシナモン香る、ケーキがおかれた。

ハッピーバースデー、ディア 優真。 ハッピーバースデー トゥーユー。
ユー。

拍手されている。名前を呼ばれるなんて久々だ。

あんたら見ない顔だね？
どうして俺の名前を？

そこは突っ込むべきところなのかもしれない。 しかし、実際に起きればそんなことは気にならず、
ただ、ただ、嬉しい。

俺は、口の端が、若干持ち上がっているのを感じた。
目を細めていた。

目の前に、四人、誰かが立っていた。

すぐ目の前には、白いワイシャツにありふれたグレーのネクタイ、同じく落ち着いたグレーのスーツを着た人がいた。髪は、誰にも反感を買うことがなさそうなほどに短すぎも長すぎもない平均的な長さであった。唯一、その髪の色がグレーであることが、外見における個性といえた。いわば落ち着いた、特徴は「フツ」の一言で片づく営業部の社員みたいな外見。

その左隣に高い帽子がトレードマークのコツクさん。こちらは背が高く、肌は褐色で体が丈夫そうだった。

反対にはウェイトレス。

もう一人はサンバイザーを付けて、カメラを回していた。

グレーのスーツの人は、俺と年はそう離れてなさそうだった。他は年齢的にバラつきがあった。

そして、全員何故か女性だった。

彼女らを惚けて見回していると。

「ほら、何ぼうつとしてるの、火、火！」

目の前にいたグレーな人に急かされて、ふうふうふうふうと吹いた。

拍手がまた響く。

悪くないなあ。

一言、言った方がいいかな。

「いやああ、本当にありがとう。まさか誰かに祝ってもらえるとは、少なくとも学校では思わなかったなあ。

こりゃあ、次はあるかわからないから、忘れることはないねえ。」

「ほら、ケーキ食べたら。」

またまたグレーな人に急かされるようにして、一人前のケーキを平

らげた。

その後、年が少し上なコックさんに感謝すると、がはは、とオヤジ臭く笑った。

No.1：プロローグ、まあ、中心人物の紹介（たぶん）（後書き）

まだ主人公（としては人並み未満な田中）について続きます。
二話目もよろしく願います。
もう一度言います、

読めば わかる！

No.2：設定紹介ではないけれど、まだまだ中心人物について（次からやるよ

まだまだ中心人物について続くから、今回は二本立て（二本投稿）！
次からやります。マジです。

No.2：設定紹介ではないけれど、まだまだ中心人物について（次からやるよ

誕生日の日は、悪くなかった。

今日は若干、気分がましだ。

「よう、田中。」

こいつは、船山ふねやま、自称親友だったやつ。

最初っからその気がないのはよくわかる。ぱしりを断った後日にだつたからよくわかる。

「お前、なんか昨日あつたそうだな。」

「え、あんた、もしかして俺の誕生日知ってる？」

「え、田中、お前誕生日だったの？ おめでとう。」

こういうヤツはほとぼりが冷めたら（そう本人が思っている）特になんてことはなかったりする。

じゃあ、と教室前でわかれた。

・・・

その日の昼休みだった。

「ねえ、田中、どうして田中ってうまれてきたの？」

二枚にまい瞬しゅんが、大きな呟きをなげた。

トイレでの出来事だった。

前の俺だったら、無意味な反撃をして、つまらないけどキツイ攻撃を精神的にも受けたかもしれない。

俺はそのまま立ち去ろうとした。

ガシ。

「おい、無視すんなって。」
引き戻された。

向こうが殴る姿勢をとったため防ごうとする。
すると、そうはせずに、向こうはこちらの反応をみて、ビビってる
ビビってる、挑発してくる。

そしてまた、向こうが拳を引いたので再度防ごうとするが。
それはフェイントであって、足を持ち上げるように、ロウをはなっ
てきた。

すぐに、膝を上げて、ふくらはぎと腿で受けるが、痺れる。
バス、とワイシャツの擦れる音がした。

気づくと、ヤツの拳が、こちらの腹にめり込んでいた。
思わず、う、となる。

膝を二三度いれると、ヤツは、舌打ちをした。

田中よわ、死ね！

と、ただ一言、それだけ言って去っていった。

……。

ああ、気分が悪い。

ああ、つまらない。

やはりこうなるのか。

俺はこうして常に誰かの気まぐれに振り回されていかなきゃならな
いのか。

俺も悪い、あの教師だと言っていた、オレでも虐めたくなると。
それに、二枚は、まともなヤツには軽い程度のちょっかいしか出さ
ない。

これからは俺も自分のことをしっかりわかって、変えなくてはいけ

ない。

そう思いつつ、俺は教室へ向かった。

N o . 2 : 設定紹介ではないけれど、まだまだ中心人物について（次からやるよ）
田中についておわかりいただけましたか。
次回もよろしく願います。

では、また来週。

No.3:やっぱり待てねえ、中途半端だと思つので進めるよ！(前書き)

自分でもアレは、母さん世代の路上紙芝居よりも切りが悪いと思つたので、次いきます。

No.3: やっぱ待てねえ、中途半端だと思つので進めるよ！

それは帰りのことだった。

歩いていると向こうに男子バレエ部員らしき後輩たちの集団が歩いていて。

目が合うと、なかでも最も長身で茶髪（生まれつきだとももつ、たぶん）なやつが、にたりとした笑みで周りに何やら話しかける。

たまに話していたサブカルな知り合いの話に二枚、他数名が後輩に俺の話をしていたから注意しろ
というのがあった気がした。

俺は普通に通り過ぎようと思った。

遠くから見ても二枚目で、女子とも仲がいらしい（登校口前で見かけた）。近くに來ると170は、あった。

身長は仕方ない。俺は163だ。

俺はクールな主人公みたいなやつではなく。

世界を救う英雄、国を統治する優秀な為政者、永く語り継がれる伝説に。

……なりたいけど、実際は婦人の尻を蹴飛ばしたり、子供からアメ玉をちよるまかすことが精一杯な、喜劇王を目指したい。

わかるひと、いたら嬉しいよ。

擦れ違う時だった。

ガ。

足を引っ掛けてきやがった。

振り返ると彼らはこちらを向いて嘲笑していた。

俺はそのまま立ち去ろうとした。

……が、あることを思い出した。

これはもともとの内容は忘れたが、情報に関する本に……。

相手と会話するうえで重要なのは、知識も能力もそうだが、それ以前にもっていなければならないのは、

自分の尊厳を傷つけられたときに、怒れることである

……と書いてあった。

相手である、長身茶髪のやつは目の前にいた。俺は、怯えを隠して、尻に蹴りを入れた。

……そして逃げた。

小物な俺にピッタリなやりかただ。

ああ、情けねえ。

そう思いつつ、振り向く。

「ごおおおおおおおお……」。

蒼い。

そこには白い道着の格闘家も真っ青な、わけのわからないものが、道の両脇を粉碎しながらこちらに迫っていた。

超能力社会に生きるってこういうことか。

俺も超能力を使った争いの見物はしたことが何度かあった。野球に興味がない人と一緒に、何がどうとかは、さっぱりだ。

でもこのとき俺は思い出した。

炎操作能力者に対して、物理的念動力者が張ったシールドを。

俺はできないとわかっていた。

でも気が付くと右手を前に出していた。

やりたかったな、超能力。

№.3: やっぱ待てねえ、中途半端だと思うので進めるよ！(後書き)

何とか漫画雑誌並みの区切りができましたか。
次回楽しみに。

No.4: 転(前書き)

更新日は、日曜と木曜に変更。
さて、やっと話が始まってきました。

No.4：転

目の前に蒼い、エネルギー球みたいなやつが迫ってきた時だった。俺は目を瞑った。

笑うことも忘れない。

俺が好きなフリーズにあった。

その男の死に顔は、まるで微笑んでいるようだった。

……せめて自分が好むように死にたい。

やりたかったな、超能力。

You Loose!

。

格ゲーでお馴染みのあのロゴまで見えた。

まるで初めてゲーセンで格ゲーに挑んで負けたみたいだな。

しゅうつうつうつうつ……。

蒸気があがる音が聞こえる。

目を開けた。

「病院の布団はこんなに硬いものなのか。」

見えたのはどこまでも茜色な天井だった。

立ち上がると、そこはアスファルトの上だった。

……天変地異が起きたらしい。
俺は立ち上がることができた。
歩くこともできそうだ。

生きているって、スバラシイ（・・・）

そして、そんなことよりも奇天烈な光景が目の前にあった。
そこには……。

黒い集団がいた。

……ほら、アレ。

ドラマで自己主張に目覚めて立て箆もったおっちゃんを包囲している大勢。

いわゆる特殊部隊ってやつ。

お馴染みの、ジャケットにプロテクター、合成樹脂でガードされたヘルメットでかためていた。

約5人くらいでこれまたお馴染みな盾を構えて、こちらに背を向けて踏ん張っていた。

辺りを見回した。

誰か状況教えてもらえないかな。いないのか。

「只今、能力者の襲撃に対応していたところです。」

ハスキーな女性の声に振り向くと、前で構えて背を向けている彼らと同じ装備の女性隊員が、ヘルメットの開口部を開けて、直立不動で立っていた。

金髪が見えた。瞳は蒼い。西洋の人か。

背は180ありそう。あの長身茶髪より高えもん。

それにしても落ち着いた日本語だな。

あ、それよりも。

「あの、僕はどうしたらいいでしょうか。」
他所行きの口調で訪ねた。

しかし、かえってきたのは意外の一言だった。

「そのようなことを言われてはこちらが困ります。」

「え。」

その時だった。

”おい、アレなんだ。”

先ほどの男子バレエ部の連中の声だ。

”テっちゃん、あっちになんか、いんだけど。”

こっちの状況に気づいたらしい。

”あのお、何かあったんですかあ。”

さっきの長身茶髪が俺と同じく他所行きの口調で訪ねる。完全に先ほどのこととは無関係を装っている。

「いかがしましょう。」

班長（たぶん）は静かに判断を迫る。
なんとなく自分の立場が見えてきた。
しかし、コレって本当に正解なのか。でも、普通に考えると、おかしい。

それを確認するには、どうすれば…。

No.4：転（後書き）

さて、突拍子もない展開です。まあ、後から少しずつ状況がわかっていきます。

今後ともよろしく願います。

短いのもあれなんでここで一つ。多分日の目を見ることないアイデアを一つ。

ヒーローモノ

” Go Average ! ”

ビシ。（「並」を表す”V”サイン）

” 自己阻害社会！ 並才 ライダー！ ”

デザイン、技、敵、
未定。

No.5:色々と始まるらしい……。 車に乗って (前書き)

前回の奇天烈な展開から、今回は色々と始まるようです。

No.5：色々と始まるらしい……。

車に乗って

俺は今逃げている。

あれから俺と黒集団とその班長（仮）は走った。

俺は思いついて訪ねた。

「専用車輛は？」

「手配します。」

なかったのかよ。

……わかったことがある。

指揮権が何故か俺にあることだ。黒集団への指示は班長さん（仮）、さらに彼女への指揮権が俺にある感じ。

俺はいつから現場の指揮官になった？

「乗って下さい。」

いつの間にか着いたようだ。

早いなあ。

イメージどおりの暗い青色をした、某特殊部隊の車輛が停車していた。

ただ、デザインは、ロゴなどが見当たらず、のっぺりとしていた。隊員と供に後ろの開いたドアから入り、両側にあるベンチ状の座席に腰を下ろした。

ドアが閉められた。

「どちらまで。」

班長さん（仮）がこちらに聞く。

「話ができるところまで。」

「では本部に向かわせましょう。」

班長さん（仮）が無線で指示を出すと車輛は動き出した。

No.5:色々と始まるらしい……。

車に乗って

(後書き)

まだまだ続きます。

No.6…色々と始まるらしい……。

車に揺られて

(前書き)

先ほどは、あまりに短くてゴメンナサイ。
色々と始まるようです。

田中と、班長（仮）率いる黒集団は、茶髪長身な少年率いる後輩たちから、専用車輛で逃走。

班長（仮）が言うところの本部へと向かうのだった。

...

車中においては、隊員の皆様方は、ヘルメットを外していた。

班長さん（仮）は金髪を後ろに結っていた。ポニーテイルというより、主婦みたいに小さな簪が後頭部にできていた。

彼女は向かいの、運転席と壁一枚隔てたところに腰を下ろしていた。その隣の人は、体格は彼らの中では平均的（ガツチリしている）黒髪の日本人でスポーツ刈りで、目付きが鋭かった。

その隣は褐色の肌で南国っぽい。名前はわからないが、三つ編みを一面に敷いて後ろで束ねたような髪型をしていて座高が一番高かった。

俺の隣には班長さん（仮）と同じく金髪だが、瞳は淡緑色の隊員さんがいて、短めの金髪を固めてツンツンにたてていた。そしてドアのそばに二人ひかえていた。

一人は東洋の人で、短髪を赤く染めていた。iphoneで音楽聴いている。

もうひとり茶髪で、今は俯いて寝ているようだった。

そして、何故か全員が女性だった。

……あれ？ このセリフ前にも言ったか？

A D、台本、八百屋でしくよろー。
……沈黙状態のまま、目的地についた。
その本部はというと。

「うう、俺ん家じゃん！」

そこは俺が家族と住んでいる家にほかならない。

「そうよ。そこは、まぎれもなくアンタの自宅よ。」
振り向くとそこには覚えのある人物が立っていた。

短すぎないし長過ぎない、でも女性にしたらベリーショートな髪に
グレーのスーツを着て、ネクタイを締めた女性が居た。

「あんた、昨日の。」

「誕生日のお祝い、満足してくれてるようね。」

昨日は気づかなかったが、タイトスカートを履いていた。

「ところであんた、俺に何か用か。」

すると返って来た返事は。

「用があるのはアンタじゃないの？」

え？

「話を要求したのはアンタのほうじゃない。」

・・・

「どちらまで。」

「話ができる所まで。」

・・・

あああ。

じゃあ、聞いてみるか。

「あんたら、一体何？ どうして助けてくれたの？」

それに帰って来たのはこれまた意外の一言だった。

「それをアンタに言われちゃ答えようがないわ。」

……。

ものすごく最近、似たようなことを言われた気がする。

なんで、と言いかけて自分をおさえた。

一番疑問に思っていたことを訪ねた。

「どうして、この人たちを指揮する権利が俺にいつの間にかついているの？」

彼女は、やっと俺がまともな質問をしたとでも言っかのようにおおきく、ため息をついて答えた。

「それについていうとアタシもアンタの指示のもと動くわ。だってみんな、あんたの欲求が生み出したものなんだから。」

え。

俺自身の欲求が生み出したもの。

人が欲求で生み出しちゃうすごいやつ。

俺の頭の中に、速すぎてまだ、影しか見たことがない同級生や、上級生が巧みに操りケンカに利用していた炎や、居眠りしているやつ鼻の穴に見えざる力で吸い込まれていく鉛筆の尻、掌で一瞬でできた氷の鈍器。

俺は他にも訪ねる。

「なんで女性ばかりなんだ。」

彼女はすぐに答えてくれた。

「それはあんた、いたって、ノーマルでしょ。そっちは。そっちってなに!？」

「じゃあ、俺は背が低い方だが、どうして背が高いやつがいるんだ。」

「アンタも知らない被護欲？」

お前はこのままだと親の臍かじるだけで終わるぞ。

あの先生の言葉が聞こえて、胸が痛んだ。

「あんた、名前は。」

「アタシは秘書。名前はまだない。なんでも主人に、ところで、あんた何か用か、と聞かれたことだけ覚えてる。」

何処の文豪だよ。

「俺が決めていいか、名前。」

「いいわよ。イタイのはやめてね。」

そうか、お前の名前は。

「お前の名前は………………。」

俺は目を閉じて熟考した。

これだというものが思い浮かんだ。目を開く。

「お前の名前は……………山田だ。」

……。

彼女の反応を待つ。

「わかったわ。少し適当だと思うけれど今はそれでいい。」

・・・

俺は気になることがあった。

でも俺はあの先生みたいに、俺が好きなんか、嫌いななんか、とストリートに聞く勇氣はまだない。

俺はこう聞くことが精一杯だった。

「なあ、俺のことはどう思う。」

彼女はしばらく黙っていた。

……が、淡々と答えた。

「今アンタが命令したらアタシを含めて、アンタの欲求から生まれ
たみんなはアンタに、

愛してるといったり、キスしたりそれ以上のこともするでしょうね。
本当のことを言うと、生まれてそう経ってないアタシらは役目に必
要な知識は持っていて、

アンタに関してはポイントでいうと、ゼロよ。

むりやり好きと言わせるのと、アタシらに好かれるような人間を目
指すのと、どちらにしたい？」

いわれると確かにそうだ。

俺はまだまだ幼稚だ。

おそらくこの能力には人の上に立つための実力が必要になる。

あの先生が言っていたように、自分を見つめ、急いで自分を直して
いかなきゃならない。

「アタシらはアンタが優しいことは知ってる。」

振り向くと彼女は腕を組んで言った。

「期待してるわよ、リーダー。」

その後ろで、「ハーレムばんざい」と書かれたライトノベルが上げ
られていた。

「……。」

車輦での移動中、居眠りしていた、茶髪の隊員さんだった。

ついに、俺は能力者になったらしい。

No.6:色々と始まるらしい……。

車に揺られて

(後書き)

まあ、そんなわけで、次回もよろしくお願いします。

No.7:あの時のこと

……一年前。

その日も俺は、担任の教師に呼ばれた。

その日俺とよく話すやつがテスト（マーク過去問）の時間当番を任されていた。

しかし、時間配分を見誤り、テストがダメになってしまった。

一見俺がとばちりを受けたように思うかもしれないが、そうではない。

俺はそれ以前に別の科目のテストを任されていた。

俺は違和感を感じて彼に訪ねた。

「もう、80分経ったのか。」

それに彼は答えた。

「もう、60分経った。」

「そうか。」

現文は60分か。

そのとき俺は彼の「おわり。」の一言で緊張が抜けて、そのまま流されるように答え合わせに移った。

……こうしてまた俺は間違いをおかした。

しかし、呼び出された俺は言われた。

・・・

今回間違ったことではない。一時的な問題ではない。
お前の一生が掛かっているんだ。

このままだとお前、

社会に出て、生きていけないぞ。

お前は甘え過ぎなんだ。

オレはお前の親が、甘やかし過ぎたとは、思えん。

世の中には人を殺したり、物を盗んだりするやつがいる。そうい
うやつは人間性の問題なんや。

それは論外や。

でも、お前は違う。

お前は見えただけで実は結構優しい。

いっしょにガキみたいに騒ぐ意味での友達ならなってもいい。

でも、一緒に仕事したり、大事なことを相談したり、一人で成功目
指して頑張る、そういうことには向かないんや、

今は。

なんでや。

オレはどうするつもりなんかって聞いているんや。

……俺は。

俺が記憶にあるうちでもっとも最初に怒られたのは、頼まれて預かった荷物をなくしてしまったときだった。

その時俺はまだ5歳だった。怒られて泣いた。泣くな、と言われた。泣かないために考えた。

しかしそれは、俺の間違いのはじまりだった。

俺は怒られることが少なくなった。

……でも進歩はなかった。

確かになくすことは、なくなった。

自分の物以外は持たなくなったのだから。

俺には妹がいる。

本人は男に生まれたかったらしい。三者面談でも母さんが俺と妹が逆の性別で生まれたら、と言っていた。

当然兄妹喧嘩もした。お兄さんだから我慢しなさいといわれた。俺はあることに気づいた。

その次から俺は怒られることがなくなった。

俺は妹に反抗しなくなった、叩かれ引っ掻かれ、泣くことを遠慮しなかった。

妹を上手く加害者にすることで逃げた。

今まで俺は、あらゆる責任から、避けることが可能な責任から、逃げてきた。

でも、俺は先生に言われた。
大事なのは責任ではない。

責任から、卑屈に逃げ回る、幼稚で醜い、自分を

見ようとすらしなかったことだと。

俺は先生に再び聞かれた。

お前はどつするつもりなんや。

俺は所々ツつこまれながらも、不格好に自分の言葉を紡いだ。

「僕は……、

今まで……、

目の前にあつて、取り組んでいる作業ばかりを見ていて、自分自身がどんな人間でどんな状況にあるかや、周りの人のことを……、見ることを忘れていました。

これから僕は何をするにおいても……、その時ごとに自分のことを見て、足りていない所をそのときに直していききたいです。」

先生は黙って頷いた。

これで終わりやないんや。

俺はこれで終わりや。

でも、お前らはこれからもずっと考えてかなきゃなんのや。
ええな？

一日に一度。

5分でもええ。

自分を振り返れ。

そうせんと、ぱあや。

いままでの全てが無駄になる。

わかったか。

自分を見つめろ。

生まれ変わって、別人格に変わるんや。

……。

もう、行つていい。

よく考えるんだぞ。

俺は帰ってから考えてみよう、生まれ変わろう、そう思った。

No.7:あの時のこと(後書き)

どうでしたか。田中が抱える問題について、ドン底なひとにも、自分では普通とおもうひとにも、なかには同じものを抱えていることがあるのかもしれませんが。

自分はどうか。そう思ったひとがいましたら、恐れてでも自身を確認してみては。

ちなみに、今回の投稿を友人に話してみると、主人公の欠点を並びあげるのは、タブーじゃないかと言われました。

しかし、主人公の成長(脱ダメ人間)には、避けられません。

田中はこれからどうなっていくのか？

次回もよろしく願いします。

No.8：能力の確認（設定資料ではない）（前書き）

今回は、田中の得た能力が具体的な形で紹介されます。

この小説の能力が、超能力モノにおいてどういったものかが、わかる回になっています。

No.8：能力の確認（設定資料ではない）

しかし、俺は超能力者になったものの。

能力がわからねえ。

とりあえず、聞いてみた。

「なあ、あんたら、どうやって出てきた？」

すると、案外簡単にその答えがかえってきた。

「アタシは知らない。けど、他のみんなはアタシが呼んだ。」

「それまたどうやって？」

その時俺はいつもよりほんの少しだけ神経質だった。

「ん、ああ、それならコレで呼んだわよ。」

どうやら間違っていないかったらしい。

山田は手に見た目は、学級日誌と同じデザインの帳簿を持っていた。

「見ただけじゃわからないでしょうから、呼ぶわね。」

それはどうやらプロフィール帳らしかった。

名前の欄はどれも空白で下に何やら5桁の番号があった。

山田はそれを確認すると、掌より少し大きい無線っぽいが、若干シンブルな形状の機械をだした。

とんとん……。

Call……。

「こちら山田、え？ 山田って誰って、貰ったのよ、名前、うん、つか名字だけなんだけどね。」

ンフフ。

まあ、こんな根暗なやつが海（マリン）とか、可愛い名前を付けてもドン引きよ。

父親のネーミングセンス引き継いでいるなら、花子か、由子ね。ハ

ハハ。

そんなことよりアンタ、早くいらっしゃい。何って、いいから。」

センス的にもそんな名前はつけない。

結構ボロクソ言われてるなあ、俺。

すると、何か視界に見えた。

自然とそちらに目が行く。

山田の隣の床に光る円ができていた。

シュパアアアン。

それは一瞬、柱になると、徐々に薄くなっていった。

光が晴れると。

じいじいじいじいじいじい。

そこにはレンズがあつた。

いや、気づいたら、カメラを向けられていた。そんなカメラは、お茶の間のバラエティーでしか、見たことがない。

撮影をしているのはやっぱり女性で、3つは年が上だろう、ライトグリーンのパーカーを着て、赤サンバイザーにメガネを掛けていた。見覚えがある。彼女は誕生日の日にもこうして撮影していた。カメラのサイズが違っただけだ。

あの時は気づかなかつたが、少し天パーだ。

彼女は手を顔の高さに上げた。挨拶らしい。確かあの日は他にも。

ふと視線を動かすと。

いた。

カメラマンの足元にいた。

黒白カラーの動きやすそうで高級洋食店に似そうな。あの日には気づかなかつたが、白のヘッドセットをつけている。

目が合うと、こちらにスケブ（スケッチブック）を開いた。

カンペらしい。

” よ ！ ”

デカデカとそれだけあった。

彼女は、こちらにカメラの邪魔にならないように小さく、サムズアップしていた。

スケブがめくられる。

” 名前を下さい。 ”

どうやら、山田に同じく、欲しいらしい。

まあ、俺もどう呼ぼうか困っていたところだ。

「じゃあ、そのウエイトレス。」

「家政婦です。」

「すみませんでした！」

あ、どうりで、正統派なメイド漫画のあの人っぽい格好してたわけだ。

それにしても口を開くと結構キツいなこの人。思わず最敬礼しちゃったぜ。

家庭科で習って、その日にクラス全員で担任にして以来だぜ。

彼女がクール過ぎて生きづらい。

ま、この場合俺が悪い。

「何アホみたいなことを言っているんです？」

どうやら口に出していたらしい。

「早く名前下さい、この野郎。」

あれ、何か言ったか今。

「何愚図ついてんのよ、名前くらいで。」そんな俺を山田が急かす。そんなことって。

お前が電話（つか、通信）中上機嫌に見えたのは、俺の孤独な太陽さん並みな、ひとりよがりだったのか。

はあ。

「よし、きめた。

お前の名前は、

氷垣だ。

氷、垣根の垣でヒガキだ。」

「どういうおつもりか知りませんが、その間にある垣根、いつか絶対に越してみせます。」

いや、お前がつくってんだろ。ちなみに垣根の垣なのは偶々だ。カメラマンが残っていた。

「あんたは、^{タケバヤン}竹林で決定。」

「決めるの早いですね。」

と、本人は苦笑い。

「これで納得？」

山田の言葉で自分の能力の確認をしていたことを思い出した。

確かに竹林たちがここに来たときのような瞬間転移系の移動手段は、超能力が一般的な20世紀においても少なくとも、公開はされていない。

「ここで一つ聞いていいか？」

「ん？」

「それ、お前の能力だろ！」

俺自身が行使できないところかもはや俺の能力じゃない。

ところで、さっきからこいつ、秘書とか言うわりには俺にタメ口だな。

「いいえ、これは本当の意味でアンタの能力よ。」

山田はそう言っていると、能力について彼女の立場で話し出した。

アタシが意識を持ったのが一昨日、誕生日前日ね。

アタシは必要最低限の知識を持って、気付いたら立ってた。

影からアンタをサポートするためにアンタから呼ばれた。それだけがわかった。

アタシはアンタを見ていて何を求めているかが、なんとなくわかった気がした。

アンタの母親が話している内容からアンタの誕生日が翌日にあることを知った。

今自分が何をすれば、アンタの欲求を満たせるかがわかった。

でも、それには予算と人員と技術が必要。だからアタシは、アンタの能力を使うことにした。

アタシは感覚的に漠然とは、わかった。

でも、この能力、使い勝手が相当悪いの。

おそらく、アンタが未発現、いや、あっても使えなかったのはそのためね。

だからアタシはこの能力を見やすいかたちに作り変えた。

アタシらはこれを「名簿」と呼んでるの。

アタシは必要な人員をこれで用意した。

...

「なあ。」

話が終わったところで、疑問を口にした。

「なに？」

「こいつらを生み出したのは俺だよなあ、じゃあ、何でこいつらは俺の知らない技術を持っているんだ？俺は料理もカメラ撮影もしたことないし、どこの部隊の所属でもないぞ。」

山田は当たり前のように答えた。

「それはそうでしょう。」

アタシたちは、こうして存在している時点で人間であり、個人であり、自分の意思で動き、自分で見聞きする。

アタシの知らないことのひとつやふたつ、知ってて当たり前よ。」

これは納得だ。となると彼女たちは、幻とかではなくて、一人ひとりの人間であることになる。

俺の頭にはいろいろなものが浮かんでは消えた。

いろいろなことに使った後は、いつの間にか消えている炎。

休み時間に、幻影投射能力者の手のひらで腰振って踊っていて、時間がくると消える裸のネエちゃんや、一瞬だけ、廊下を歩く女子高生の腰を撫でる不自然なそよ風。

それらは役目を終えたら、すぐに消えていった。

しかし目の前にあるものは、そんなものとはまるで違っていた。

消えないし、意思があつた。

「アンタの能力はそういうものよ。」

なんとなくだが、少しだけ掴めた気がした。

「ところでアンタ。」

「何？」

「後ろのみんながなんか言いたそうにしてるんだけど。」

ちら。

「長官（ボウズ）（優真君）！ 名前を下さい（くれ）（くれないかい）。」

「長官」は、部隊名未定の隊員さん方。

「ボウズ」は、誕生日ケーキを作ってくれた、20代後半のどこかオヤジ臭い、高い帽子がトレードマークである、コックのネエちゃん。

「優真君」は。

.....。

「あなたはどちら様でしょうか。」
そこには。

茶髪ボブにワインレッドのスーツとパンツのクールな（たぶん）女

性がいた。美青年でも通じそうだ。

なんとというか、芸大の生徒さんにもみえるし、ひとむかし前の漫画に登場する実業家に見えなくもない。

「まだ名前も決まっていけないのに、どちら様とは、大した無茶ぶりだねえ、優真君。」

彼女は細い目をさらに細めて、苦笑いした。まるで面倒臭がりな猫（たぶん田中の偏見）みたいだ。

「強いて言うなら、ボクは……。」

「君の株主だ。」

⌋
⋮
⌋

「でも、それには予算と人員と技術が必要。」

「でも、それには予算と人員と……。」

「でも、それには予算と……。」

「……予算……」。

そういうことだったのか。

•
•
•
○

みなさん……、うーっ……。

うち 능력には、株主がいるようです。

……言つてて、会社みたいだな。
そんな立派な指導は難しいが。

「ところで。」

「ナニい？」山田が応える。

「ここ、どこなんだ？」

「ついてきなさい。」

「……………」

俺は山田に連れられて、広いスペースを出て、廊下を数回右、左……と曲がる……。

「上るわよ。」

カツンカツンと梯子を上る。

上がると今上つてきたところは、いわゆるハッチというものだった。
そして……………。

「……この俺の部屋じゃん！」

ボタン。

それはハンドル状の取手がついていた。

「それ、アンタやアタシらの指紋を認証してでしか、開かないようにしてるから。」

セキュリティか。女子大生も安心だな。
どうするんだこれ。

いや、なにが、ってコレ部屋のご真ん中にあるんだぞ。

扉から。

左、ベッド。

正面、窓、机。

視線を下に45度ずらす。
ハッチ。

いや、ホント、どうすんのよ、そこを」。

「大丈夫よ。そんなこと。」

彼女はハッチの隣に屈む。

.....。

彼女はハッチに両手を置く。

「せえ、の！」

ズスー。

.....！

動いた。

ハッチは.....、スライド可能だった。

「せい！」

彼女は今度はハッチを立てた。床とは垂直方向に。

「こうすれば、カバンにだって入るわよ。」

.....さらに携帯可能だった。

「よっ！」

山田はハッチを床に下ろすと、俺のベッドの下に収納した。

「ね、便利でしょう？」

.....さらに部屋の収納スペースにも優しかった。

「.....。」

みなさん...、うちの能力は、基地を保有しているようです。

・・・

現在の人員確認

秘書・・・山田（ヤマダ）

カメラマン・・・竹林（タケバヤシ）

専属家政婦・・・氷垣（ヒガキ）

コック・・・山縣（ヤマガタ）

特殊部隊（名称未定）

班長・・・北河（キタカワ）

副長・・・石見（イワミ）

鋭いひと。

最高身長・・・南河（ミナミカワ）

いひと。

最高筋力・・・春川（ハルカワ）

をツンツンにたてたひと。

主に見張り役・・・焼津（ヤイツ）

東洋系赤髪のひとつ。

三川（ミカワ）

スポーツ刈りで眼つきが

南国っぽ

短い金髪

茶髪で瞳はグリーンで、若干長めのボブのひと。ヲノベ読者。

No.8：能力の確認（設定資料ではない）（後書き）

それと、この小説の進め方が定まりました。同席した友人に言われました。

「そんな無茶な。」

No.9:うちの秘書はタメ口をききます(前書き)

今回は田中の学校生活について触れていきたいと思います。

No.9：うちの秘書はタメ口をききます

名前はわからない、小鳥の声が聞こえる朝。

「俺はいま……、本当に……これでいいのだろうか。」

それが田中の一日において決まっている、第一声だ。
彼はあの日教師に言われた。

・・・

お前は考えていないとダメだ。

ぼうつとしていると、また自分を見なくなる。

・・・

そう、口にすることで田中は自分について認識しやすくなる。

今日、必要になる課題。

今日の時間割。

今日もある毎日恒例の課題。

起きてすること。

朝食や洗面などの。

大体いっところまでに家を出るべきなのか。

そういうことを考えるのに彼は未だに慣れてなかった。

そして俺は、いつてきます、と言って家を出た。

そのまま駅に向かう。

高校に向かうバスに乗った。

はじめはそうでもないが、目的地に近づくにつれて、高校の制服が

多くなっていく。

皆テレビ番組や、ネット動画、高校の課題のことなどを話している。俺は課題をしつつ、若干田んぼの多い通学路の景色を脇見する。

・・・

空は青く、…………… 5割強は雲だが。

田んぼはああおとしていた。

……途中で、みかんのイラストがはいった白ヘルから茶髪をのぞかせた無表情の女性が、紙袋を積んだ地味なスクーターに乗って隣を通過していくのが見えた。

どこかでみた気がするが、……………気のせいだろう。

・・・

そうこうする内に、バスは高校前に到着した。

彼が入っていった校門には、

「百済音高校」とあった。

もちろん、超能力は一般的であるから、専門校があったり、成績や、クラスの優劣が決まったりということはない。

背が高いだけでトップクラスにはなれないのと同じである。

それに危険であるなら、すでにそれなりの施設におくられているであらう。

火気操作能力にしろ、放電能力者にしろ、ライターなどの便利な日用品と比べたところで、

根本的な危険性に違いはない。

個人が用心する以外に仕方ないのだ。

廊下を歩いていると、すぐ隣をサツ、と黒い影が通り越していつ

た。

「おはよう。」

向かいから来た女子がそれに挨拶をする。

気づくとすでに通り過ぎた後だ。

どこかで聞いた少年アイドルグループの曲が流れる。

先ほどの女子が何やらごそごそします。

着信があつたらしい。

「……………」

メール内容を確認した彼女はただ一言漏らした。

「口で言えよ。」

どうやら先ほどの生徒はかなり急いでいたらしい。

それよりも田中は、あの影も返事は返すんだな、と感心していた。

「なあ、キャッチボールやろうぜ。」

「あの赤い水道管屋の兄さんが投げるような火の玉、どうすりゃいいんだよ！」

あちらもあちらで楽しそうだ。

参加は……遠慮したいね。

「ふほうっ、へんっぴつぐはあ（くそう、鉛筆がああ）！」

「殴りたいの、まっちゃん？」（氷の鈍器精製）

今日の2のBはいつもどおりだ。

・・・

学校が終わると、そのまま校門へと向かった。

歩きながら考える。

一年前、俺は真下を向いてここを歩いていたな、と。

名前も知らない先生とすれ違いざまに挨拶をかわし、校門を出た。

「……………ま、……………きたわよ。」

ん、待ち合わせか、俺も中学の頃に…。

「……ユウマ！」

ん、誰か俺の名前を読んだ気が…、ま、こんな時こそ気のせいであることが…。

「ユウマ！」

俺の襟が何かに引っかかる。

！

そして上半身が後ろに滑るように引っ張られる。

「のぐお？」

「ああもう、だからあ。」

振り返るとそこには。

「迎えに来たっつてんでしょバカ。」

秘書のはずだが、タメ口な山田がいつものグレーのスカートとスーツという服装で立っていた。

つか、とうとう「バカ」とまで言われた。

……まあ、今の現状じゃそれも仕方ないことだ。

彼女は最近になつてできた日常における異常だ。まあ、生み出した（ことになつている）俺は置いといてだ。
言つてつてなんだが、タメ口秘書なんて史上初じゃね？

・・・書いた僕が友人に話すと、もはや秘書じゃねえ、って返されたからねえ。

サッ。

「……今、なんか言った？」

「いきなりナニ？ アンタ、変な声でも聞いたの？」

ヒゲのオジさんにハガキ書いたら？

運がよかったら、ハレてY君よ。」

それはあまり嬉しくない。

・・・

俺は帰宅途中必ず寄る公園があった。

広い砂地のスペースが中央に取られていて、その周りをタイルが敷いてあり、他に小さなシーソーと、揺れる遊具、隅にレンガで温もりあるデザインの公衆トイレがただの素朴な、悪く言えばダサイ公園だった。

でも、夕方になると、公園全体が茜色に染まるのは、悪くなかった。遊具に乏しい公園ならではの悪くない光景だ（美しいなんて”こ”とば”は、俺にはまだ似合わないとおもっている）。

「なあ。」

「ン？」

誰かと外で話すのは、久々だ。

「何よ。」

俺は知らず知らずのうちに笑みを漏らしていたらしい。

「今日な……。」

本題に入った。

・・・

この日も俺は先生に呼ばれていた。

先生いわく、素行は問題ないそうだが、むしろ周りで過激なヤツは、故意でないにしろ、ガラスを割って説教をくらったそうだ。

俺の場合は表に出る問題というよりも、根本的な問題だそうだ。

俺は呼ばれた時思い出した。

・・・

その日もテストがあった。

それは英語のテストで、制限時間は、80分だった。

俺の成績は散々で、200点中、92点だった。

俺はただ焦って前から解いていた。

そのことがいけなかったらしい。

最後まで解けずに白紙の回答が残った。

・・・

俺は先生に説教された、そのうちに気づくことがあった。

以前よりも物や用事を忘れなくなったが、問題の配点をよく見なかったり、問いをよく読めばわかることに気づくのが遅かったりした。自分の、一部分に気を取られて、全体を見失うという欠点が、猪突猛進という形になってあらわれている。その事を先生に言うつ。

お前はことばを聞く限りわかつてはいるんや。

でも、これで終わりにしたらあかんのや。

続けないといかんのや。

ええな、自分自身をいつも振り返るんや。お前はそうせないかん。

・・・

「ま、そんなことが今日あったんだ。」

山田は俺と同じく夕日に染まった公園を眺めつつ聞いていた。

「ふうん。」

彼女は立ち上がった。

「ちよつとついてきて。」

そして歩きだした。

……………何だろう？

……………着いたところは高校だった。

うちの高校は、警備は特別な日以外はいない。

放課後はほとんど人がいなくなる。

だから部外者である山田がいても咎める人はいない。

俺らは今、昇降口の広場にいた。

彼女は急に立ち止まると、こちらを向いた。

「アンタ、今日がいつなのかわかる？」

いきなりそう尋ねてきた。

「え…………と。」

答えようとした。……………でも、答えが出なかった。

思い出せない…………。

朝のことは辛うじてだが思い出せた。

そのことが示すのは…………。

（…………俺はいまだに平均未満だ。）

そう呟くように漏らすしかできなかった。

「5月××日、木曜日よ。」

ああ、今日は、と俺の頭がそれを認識する。

「アンタはダレ？」

「田中 優真。」

「ここは？」

「百済音高校。」

「アンタ、何年生？」

「高校2年生。」

「何組？」

「B組。」

「番号。」

「15号。」

「何のために高校行ってるの？」

「それは……………」

俺の両親は医師だった。

医療は基本的に能力は使わない。たいてい、他動的治癒能力だろうと、なんだろうと細胞を変性させるものだからだ。

操作手段が精神的では危険である。

俺は病気をした時に両親に看てもらっていて思ったことがある。

目の前の人がどんな些細なものであれ身体の不調で苦しんでいるとき、自分は薬を持ってくる人や、医者診察を待っていられるだろうか。

多分自分が医師であれば、知識があれば、診察できたら、薬物の処

方ができたら。

何でレスキュー隊じゃダメなの？と聞かれるかもしれないが、そうしている時でも続く苦しみには、強力な胃薬であったり、疎い人はわからない楽な態勢に保つことであったり、直接的に身体に働きかけることで治まるものもある。

しかし、自分は父親のように外科医は無理だと思う。

自分でも、手先が器用でないことはわかる。

それに他にしてみたいことがあった。

・・・

4月のことだ。

中学校は男子校だったが、今通う高校は男女共学だった。

俺は思春期に入って、意識してしまい、自分を嫌悪して、そしてもととが人見知りで、その上成績も悪かったため、全てはまとまり「劣等感」へと姿を変えた……。

そのときだった。俺はよく胃を悪くした。堪らなくなった俺は医師に看てもらった。

診断結果は、神経過敏のようなもの、だった。

そんな俺への処方箋は強力な胃薬と「……まあ、気にするな。」の一言だった。

それは突き放すような物言いではなく、凍える様に縮こまった小物な俺を優しく包んだ。

病院のロビーを出たときに、悪くないねと口からこぼれたのを憶えている。

・・・

……だから俺はストレスに携わる医師になろうと思った。

・・・

そう、山田に話したとき、俺は何かを掴んだ気がした。

今、俺は、高校で、将来のために、勉強し、そのためにここにい

る。

そう認識した。

遠くの方で、今まで気づかなかった車の走行音がした。周りの音が急に増えたようだった。

「そうか……。」

俺はまた周りを見失っていたのか……。

「アンタもまだまだってことよ。」

山田は腕を組んで、溜め息とともにわずかに微笑んだ。

「アンタはまだ終わってないでしょ。しっかりしなさい。」
パン、と背中が叩かれた。

ふと、山田のほうを見た。

短かすぎもせず、長すぎもしない、グレーの髪は無機質に緻密に整えられてはいるが、それは柔らかくもあるように思えた。

人形のように整っていて、しかし、得意気な笑顔には、温もりが感じられた。目を見ると、少し暗めの蒼い瞳に吸い込まれている気がした。山田はこんなにも、…… × しかったのだろうか。

「いまさら気づいた？」

どうやら、またも口に出してしまったらしい。

山田は照れるのでもなく、俺が最も予想していた「キモッ」というのでもなく、ただ腕を前で組んで、フフン と鼻を高くして、こちらに対して微笑みを向けていた。

「あはははは……。」

俺は頭のうしろを掻いた。

そして、ひとことだけこう言った。

「山田、そろそろ帰ろう。」

No.9:うちの秘書はタメ口をききます(後書き)

何か変更があれば、活動報告にて連絡しますので、その時は、次回もよろしくお願いします。

コラム1（前書き）

この回では、田中の能力に関わるメンバーを紹介していきたいと考えております。それでは一人目、いきます！

コラム1

山田

ヤマダ

年齢：19歳

役割：秘書、「名簿」の管理、その他、あれば事務的なこと。

特徴：短すぎず長すぎない、こざっぱりとした、灰色の髪。

白いワイシャツにありふれているグレーのネクタイ、グレーの背広とスカート。

深く蒼い瞳。タメ口。

真面目そうに見えて、実はくだけて

いる。

雑記：見た目は田中とそう離れていなくとも、2つ年上。

秘書なのになぜか田中に対してはタ

メ口。

今のところヒロインっぽいポジション

ンにいる。

秘書だろうと、田中に逆らえないはずの立ち場だろうと（No.6を参照）

田中を甘やかしたりはしない。しかし、たまに田中の背中を押すこともある。

田中の人格的な成長に期待している。実はボディーガードとしても機能す

る
に
し
て

コラム1（後書き）

たまにいられていこうと思います。

No.10 : 能力名は……………(前編)(前書き)

今回は超能力モノにはつきもののアレについて扱って行きます。

No.10 : 能力名は……………（前編）

俺は近頃、迷っていることがある。

それは……。

「うわ、すげえ、氷製造能力ってこんな使い道があったんだな。」

「俺の火気操作能力だって、お前の伸びたヤツをバーバーするのに……。」

「お前は何もするな！」

「こら、席に着きなさい。物理的念動能力はそんなことのために使うもんじゃありません。」

「ツチ。」

「ほい、ほまへ、ふこしははんへいしゅろ（おい、お前、少しは反省しろ）！」

能力名って、俺の場合どうなるだろうか？

この国において、能力は個人の管理に任されていて、能力名は、大学に引きこもってらっしゃるお偉い方が決めるのでも、世界の転覆を目論む厨二なサイエンティストが決めるのでもない。

本人が好きに決めてもいいのだ。

まあ、俺には関係ないことだが……。

俺は今までに起こったことは非公式にしておくつもりだ。

能力から生まれてきた存在が、人として見られるとは限らない。北河たちが紛争地帯に向かうのを見たくはない。

さて、本当にどう決めたものか。

・・・

昼休みになつて俺はすぐに購買のパンを買いに行った。

カレーパン（裏声）！ と、中華まん（肉まんもどきぱん）を買いに。

ぷるるう……、パタン。

原付独特のエンジンを切る音がした。

化学の教師だろうか。

・・・本編には出ないけどね。

「あれ、また変な声が……。」

ドン。

思い音にそちらを見ると。

「三川屋です。」

「……………」

いつぞの茶髪のみかんライダー（原付）がいた。
というよりも……。

「三川さん、何してんですか。」

うちの能力の隊員さんその六の三川だった。（第5、6、8部、参照）

ミカンマークのヘルを取った彼女がこteri、と首を傾げると、少し長めの茶髪のボブが揺れた。

「配達……？」

グリーンの瞳がこちらにあつた。

落ち着いた儚気な声色が、山田のように呼び捨てにすることをこちらに遠慮させる。

「なんでミカンなんですか。」

「ミカワだから……。」

ほー……。

ほけきよ

たぶん。

それはあなたの偏見なのでしょう。

「画像にヒットした。」

またも俺は口に出してしまっていたらしい。

「まあ、ありがとう。」

どこが変わっている彼女は、どこか重々しい歩き方で原付にもどると、例のミカンヘルをかぶり、こう言った。

「……………ミカン屋、またの利用お待ちしております。まあ、す。」

ブル、プルルルルルルル…。

ミカン原付を駆る三川のシルエットは遠くの一点となって消えていった。

「……………。」

最後、屋号が変わった……。

・・・

放課後のことだった。

・・・さてと、今日も田中はそのまま帰宅……………。

サッ。俺は振り返った。

.....。

また変な声がしたからだ。

「あれ？ 気のせいかな？」

俺は気を取り直して歩き出した。

・・・（小声で）まさか僕の声が、聞こえるなんて彼はやっぱり特別なのでしょうかね。まあ、微妙なことに変わりはありませんが…。

……校門が見えてきた。

「……お、おい。」

おどおどした男の声がした。

振り向くと、そこには、特徴的な男子生徒がいた。

髪は、染めてはいないが、ワックスで無造作ヘアーをつくっていた。目付きは鋭く、制服のポケットに手を入れて立っていた。彼は誰かを睨んでいるようだった。田中は小説の主役ってあんな感じだろうなと、自分とは違い、勇敢そうな顔立ちを眺めた。そして、睨まれている相手は……。

「氷垣！？」

そこには、うちの能力の家政婦である、氷垣がいた。

こちらを向いた。

気づかれた！？ 俺、そこまで大きな声で言っていないぞ。

「そこからなら、もう十分です。」

俺と彼女らとの距離は1.5メートルほどだった。

あと、また声にでていたらしい。

必然、彼女がこちらを向けば、もう一方の男子生徒もこれに気づく。

……まあ、なんだ、俺もそいつの視線に刺されたんだ。ちゃーら、ちゃあらあん。

「そんなメロディを出してもはじめからどこにも疑惑はありません。」

「口ずさんだのはサスペンス劇場のあれだ。」

「わからない人、俺もほとんど見てないから気にするな。」

「……依然と、俺は睨まれているわけだ。」

「と、いうわけで……。」

「ちょっと、ガツキー、んもおう、この人こわあい！」

「まあ、バカップルがやるアレだ。」

「私にどんなリアクションを期待しているのですか。」

「だが、返ってくる反応が冷たい。」

「……チツ、俺はやって見たかったんだよ！」

「……そんなことじゃ読者が引いちゃうと、僕は思うんだな。」

「サツ。」

「どうかしましたか。頭がおつかれですか。」

「え、ああいや、今変な声が出た感じがしてねえ？」

「はやく帰って休むことをおすすめます。今外出されては、まわりに迷惑が掛かりますから。」

「……ん？ 一応俺を心配しているようだが、部分的に俺が罵倒されている気が……。」

「そういうわけで私はこのやろ……、いえ、この野郎を自分のブタ箱にお連れしなくてはいいけません。ではこれにて……。」

「おい「ちょっと待てよ、おい！」。」

「もう一人何か言いかけてたけれども、これだけは見過ごせない。」

「ええ！？ 今のなにいったい！？ 君、家政婦なんですよ！？」

一般的に家政婦って、雇い主立てるんでしょ！？

今の酷すぎない！？ 訂正するならまだしも、途中で諦めた上にさらに本音全開放してどうすんだよ！？ 訂正するならもうちょいがんばろうよ！？」

すると氷垣は、静かにこう答えた。

「私は、別にあなたに雇われているわけではありません。」

ほろ、ほけきよ

え？

その時俺の胸にくるものがあつた。それは、一言で表すなら、恐怖。何かをなくすかもしれない恐怖だつた。

俺は堪らなくなつて彼女に尋ねた。

「なあ、あんたは、俺の……、いや、そうじゃなくて、その気になれば、他所のうちの家政婦になっちまうのか？」

正直言って、答えはわかっているけど一応。

「はい。」

ええええええええええええええええ！？

いや、わかっていただけ但实际上に聞くと、衝撃がヤバイ。

俺は泣きそうになった、でも、あの教師が言っていたから、俺はこらえた。

「そうか。」

俺はどうしようもなくなって両の手を地につけて一言。

$$\neg \text{O} \dot{\neg} \dot{\neg} \dot{\neg}$$

「それ、ネタの賞味期限は大丈夫ですかねえ。」

「やべえ、不安になってきた！」

「おい。」

ん？

「あ、俺この人どつかで見たことあるぞ、ほら、アレ、アレアレ！あのカツコいい人！ほら、あの人気バラエティに出てる人！」

「安心して下さい。別にいきなり取り繕わなくても、それ程著名な方ではありませんので。」

あれ？ 氷垣、合わせてくれるのは嬉しいけど、どうしてそんな嫌そうな顔してるの？

「見たも何もさつきからここにいるだろ！？」
「かつこいい彼は何やらご立腹のご様子。」

ちよつと待つてね。

きゅiiiiiiiiiiiiiiiiん……カチャ。

ええつと、五分ちよい前の校門の真上のアングルだねえ。

お、学校から歩いてくる俺、…特にいうことはない。

さつきは気づくのは後だったが、校門前に人待ちをしているウェイ……メイドさんがいる（つか、氷垣、わかってるみたいにくっち凝視すんな！？つか、恐！？）そこに男子生徒が近付く。主役登場、ってところか。（……何を言っているの？きみこそ主役だろ。）サツ。また変な声が！？（余所見しちゃいけませんよ、この野郎）氷垣にたしなめられる。ところでいったいどこに…。

「いや、俺写つてたでしょ！？」
ほら、そこにいるほら、その

男子生徒オレだから！」

あああ！

「ああ！……じゃねえよ。軽く流すなよ。いただろ、オレ！？
お前おかしいだろそれ！？」

俺は浮かび上がった自分の問題点に驚愕した。

うわあ……………。

衝撃が俺を襲った。

「俺ってヤバイかも！？　今ので一ヶ月分会話したことになる。」

「誰がお前の一ヶ月の会話の量を問題にした！？　いや、オレは無視すんなつつてんだよ！」

おお！

「いや、感心するとこじゃねえだろ！？　そこ！」

まあ、ともかく…………。

「ありがとう、竹林。いい仕事したね。」

「あざっす。役に立てて、こっちが嬉しいっすよ。」

後ろの方で腕を組んでいた、ライトグリーンのパーカーの彼女が赤いキャップの上から頭を掻いていた。

赤いメガネが輝いて見えた。…………俺の能力のカメラマン、竹林だ。

（第8部参照）

・・・え？　サンバイザーはどうしたかって？　覚えていてくれた？　それは嬉しいね……。キャップの方が楽だからそうだよ。覚えてくれてた人、いたら、嬉しいなあ。
サッ。…………まあ、いいや。

え？　校門の真上からどうやって撮ったかだって？
そんなことを聞いたってつまらないだろ。

え？　なんで竹林がいるかって？　そりゃあ…………。

.....。
なんでだっけ？

ほお、ほけきよ

「いや、だから、お前が思い出せないなら、巻き戻してみようって言うから、そのメイドが...。」

ポオオオオオン！

殴ったあああ！？ あ、よく見たら日刊くだらね、つか、ここ的高校、よく平仮名表記OK出したな。

「何すんだよ。そのメイド！？」

俺も別にいいけど聞いてみたい。

「馴れ馴れしい。」

「じゃあ、どうすりゃいいんだよ。」

「明後日の方を向いて、『そこにいらっしやる自分が目にするのもおこがましい、尊い御仁』と呼んでくれたら結構です。」

「面倒くさ！この人面倒くさ！つか、どんだけ偉いんだよ！？

語尾は謹んでいるようでも全く持って遠慮がねえ！」

とりあえず.....。

俺らは、いまの状況を確認するために、俺個人と能力についての記録をまとめてくれている竹林が撮影した映像を、折りたたみ机の上の小型ディスプレイで、三人仲良くパイプ椅子に座って見せてもらっていたわけだ。コーヒーも出たよ。

「タナカーメンもあるっすよ。」

テレビ局の食堂がよ！ 因みにそっちは山縣（うちの能力の

ツク）特製らしい。

「いい加減本題入ろうよ...。」ああ、さっきのカッコいい人。

撤収！ と、竹林が号令をかけると、なんていうか、アレ、ADのみなさんっぱいのが地味で機動性ある服装で、ディスプレイや、机、椅子などを片付けていった。

最後に、ピンクのフード付きを着たボブヘアのADさんがトコトコ近づいてくるのでなんだろう、と思った。

「微糖」くれた。

うちの能力のADさんは、気が利くようです。

もう、そろそろいいか？

.....かれこれ三十分が経過していた。

じいじいじいじい.....。

見ると竹林がひとり残ってこちらの記録を撮っていた。

俺はそのレンズを見ていま自分がなすべきことを感じた。

俺は俯いた.....。

まとまった。

.....俺は再びレンズに顔を上げると言った。

「CMのあと！」

.....ないけど。

No.10 : 能力名は……………(前編)(後書き)

アレ？ 氷垣を出すとギャグパートになるのはどうしてでしょう？

次回もお楽しみに。

コラム2（前書き）

では、今回もいつてみよう！

コラム2

竹林

タケバヤシ

年齢 20歳

役割 田中についての記録。カメラマン。

特徴 赤いキャップにメガネ。グリーンのパーカーを着て下は本文では描写されていないが、ツツコミようないほどのデザインシャツである。口調から、雰囲気からして裏方っぽい。

雑記 彼女は登場する時は田中にクローズアップしていたが、今回は妙なアングルから撮影している。

A Dの他にもスタッフも設置したから、そのおかげで撮影手段が広がったのだろう。
本来の仕事だけでなく、再放送の番組の録画を引き受けてくれるあたり、サービス精神がある。

氷垣

ヒガキ

年齢 24歳

役割 田中の専属家政婦 他の人員のアシスタント

特徴 表情は静止したようで、話す時になってやっと人らしさが見える。

家政婦のはずだが、口がシヴィアに悪い。

紺の長袖と膝下までの長さの紺のスカート。下には紺の長靴下を履いていて、身につけているものではエプロンとヘッドレスだけが白い。

雑記 きつと、心のどこかでは、田中を慕ってくれてい
る……………かは、微妙。

コラム2（後書き）

書いてて気づいた訳ではありませんが、ギャグパートどころか波乱の予感がしそう……かは微妙。

No.10 : 能力名は……………(後編)(前書き)

そつえば、はじめてですね、前後編。
ま、そんな訳で、行っちゃいましょう。
今回も、ひょうきん者で、よろしく！

俺たちは校門前に対峙していた。

目の前には髪を無造作へアーに固めた眼つきの鋭い男子生徒が何やら、動きやすいように腰を落として構えていた。

俺はというと、見よう見まねで動きやすいように構えた。「エクササイズ番組を視聴する人みたいですね。」

カラになった「微糖」を持って……。 「捨てたらどうですか？」

「……………」

静かに俺の言動にツツコミを入れている氷垣は、ただ、何をするのでもなく、体の前で手を組んでたたずんでいた。

俺がいま対峙する、目つきの鋭い無造作へアーのカッコいい人は、なんかかんやあつて、只今俺らと決闘することに決まった。というか、勝手に決められた。ドラマの再放送の録画という理由は通用しなかった。

「それならウチのモンでやらせときますんで、……Pi！
……こちら竹林ッス。……………というわけで、しくよろしく。」

竹林がやってくれるらしい。

「で、あんた誰？」

「また忘れたのか！」

「……………いや、そーいやあんた、まだ名乗ってないだろ。」

「ああ、それか……………お前には関係ない。」

「ほら、ご覧なさい、この野郎。」

「……………いや、あんたに何がわかんのか？ いや、ドヤ顔されても……………」

とにかくやりたかっただけらしい。誰に似たんだか……。

「俺はこいつに用があるんだ。」

どうやら氷垣に用らしい。

「私が門で優真様をお待ちしていたところ、このか……ソレが私がここで何をしているか、誰に仕えているかなど、いろいろ尋ねてきましたのでうるさくて仕方がありませんでした。……それに拳句の果てには私の名前を尋ねてきましたので、関わる予定もない者に教える名前はない、と返した次第です。」

あ、そうか。

「いわゆるナンパだね。」

「なんでそうなる！」

意に介さないようである。

「お前が校門前で3人に絡まれていたから助けてやったんだろうが！」

そうなのか？ ああ、そういえばモニターの画面右下が途中でなんか騒がしいと思ったら、やってたのかアレは。

「そんなこともありましたね。」氷垣はあまり気にしていないようだ。

それを見て、カッコいい人は大きくため息をついて、無造作へアーを掻きむしった。

「はあ、わかった。言うよ、俺は、コクジヨウ、黒上 守だ。」

コクジヨウ、マモル……、主人公的だ、何より響きがいい。

「羨ましいのですか？」

「いや、別に。」

聞こえたらしい。

「ああ……マジで殴りたくなってきた。」

バチバチ・・・・・・・・。

見ると黒上くんとやは、なんか……右手に紫電を纏わせていた。

バチバチバチバチ……………。

それはまた先ほどのように手のひらに集められる。

ビリリリリリリリリリ……………。

放電音が連続的なものから一つの音に変わっていく。

バアアアアア……………。

紫色の輝くエネルギー球を持ち上げるように掲げた。あ……、何と
いうか、これはヤバそうだ。

「もういいかげんに、行かせてもらっぞ。」

黒上は構えた。そして駆けた。

ダダ……………。

……………バチバチ……………バアアアアア！！

紫電の塊が今俺に叩き込まれようとしている。

「おおおおおらあああああああ！！

いっけえええええっ！！」

田中の前に現れた、主人公っぽい超能力者である黒上 マモルは無
造作へアーの間に見える目を細めて不敵な笑いを浮かべた。

…… い、いっちゃんうううううううう

……彼はすべった。

俺たちは音のほうを見た。

「……………もしもし。」

そこには、バイクのハンドルにミカンマークのヘルメットを置いた三川が携帯電話にでていた。

「三川さん、なんて着メロいれてるんですか!？」

いや、ブイ!　じゃなくてですね……。

「……………そろそろはじめるぞ。」

振り向くとそこには……。

バチバチ、バチ……。

黒紫の電気をその身に纏わせた黒上の姿があった。

その放電はやがて、右腕に集約されていく。

先ほどから見ていてそれは何というか……得体が知れない。色からしておかしい。

当たったらなんか怖そう。

俺は逃げる姿勢をとった。

「いろいろとバカにしてくれたけどな……。」

黒上は、まるでイタズラをするときの子供のような笑みを浮かべた。

「俺の『黒紫の雷』を受けてもそういられるかな？」

黒上はそう言うと、その手にある放電はやがて、ひとつのエネルギー球へと形を変えた。

バチバチバチバチ……。先ほどよりも小さかった、理性よりも感情の方が今は強いらしい。それでも、危険はそこまで変わらない。うわ、今その周りにある空気中の動きが視認できるぐらいに凄まじいことになってる！？

確か今日は乾燥しているそうだからな。

彼は、ありふれた投球フォームをとった。

「い……つけええええ！……え？」

彼は途中で攻撃をやめた。

……………。

その場の雰囲気が変わっていた。

殺気に支配されたとは別の意味で殺伐としていた。

何時の間にか、通行人による大衆がそこにはあった。

ひそひそひそ……………。

「ほら、いまなんて言った？」と通りすがりの先輩方。

「黒紫のなんとかって……。」とその連れ。

雰囲気が変わったのには理由があった。

まず、この時代においても本屋で手に入る小説にはSFモノがあり、超能力モノもある。パイロキネシスや、なんとかアイズ、テレポーテーション。能力名はシャープなモノが多い。確かに、所有者である俺たちには、能力名を決める権利がある。

しかし、国のほうもそれを管理しなくてはいけない。だから必然、それは住民票を始め、役所に提出する重要書類に記入する必要がある、他にも人生のいろいろな場面で大きく関わってくる。もちろん、結婚式における新郎の紹介にも。

「……新郎、黒上マモルは、『黒紫の雷』の能力者で……」
「まあまあたいそうなお名前ですねえ」と遠縁のおばあさん。

……いやあ、少なくとも俺じゃ耐えられない。

「あいつ……病じゃね？」

「その女子高生、たぶん聞こえてる。」

……とまあ、こういうわけだからこの国の能力者がもつ能力には、地味でダサイ名前が多い。

俺は痛感した。やっぱり能力名は大事だねえ。

「クソ！ 気を取り直して……。」

それ以上は続かなかった。

「……。」

彼は声が出なかった。

彼の腹にはあつたからだ。

紺の長スカートから伸びた、紺色の長靴下につつまれた、無駄なモノがない洗練された氷垣の長い足が。

重い袋が落ちたような音だった。

……どうしてこうなっているんだ？

「優真様、時間の無駄です。行きましょう。」

いつもの器械的な氷垣がいた。

俺は驚いていた。あの面倒臭がりな氷垣のことだから、傍観するモノと思っていた。

何か確認をしたくなった。

……でも、いい方法が思いつかなかった。

今日はお開きになった。

・・・

翌日、家を出ると氷垣がいた。

通り過ぎようとする、彼女は丁寧な礼をして言った。

「いつてらっしゃいませ。背中に気をつけてご登校ください、この野郎。」

背中に何があるんだろうな、本当。

.....。

俺は振り返った。

直立不動な氷垣と目が合った。

なあ。

「俺は.....、このままあんたを俺のためにだけ働かせていいんだろうか。」

ただ沈黙が続いた。

もう、完全に無視されてるな。そう思ったとき、やっと氷垣は、その動きそうにない静止しているような口を開いた。

「たしかに私はあなたに雇われているわけではありません。」

やはりそこは動かなかった。「ですが.....。」彼女は眉ひとつ動かさずに続けた。

「こんなブタ箱、好きでもなければ、とっくに点け逃げしてます。」

俺は頭が止まった。たしかに言っていることは表面上はひどい。しかし、そこにはいつもはよくわからない、何かに対する愛着が見えた。俺は堪らなくなつて、気付けば、思っていたことを氷垣に対してぶちまけていた。

「俺の親が苦勞して建てた家をブタ箱言っな！　

しかも、人ん

ちに何点けようとしてんだよ！？」

彼女の黒いボブヘアを風がさらりと吹いた。

彼女は依然とした無表情で応答する。

「いえ、流石に私は優真様の立派なご両親を侮辱するようなことは
しません。あくまで優真様の自室でございます。」

家政婦が面と向かって本人の部屋のダメ出しするなよ。

No.10 : 能力名は……………（後編）（後書き）

ちよつと一月ほど休みます。ここ読んでない人も「お知らせ」で更新してます。

また、その時まで……………。

ひょうきん者に……………よろしく！

コラム3 (前書き)

今回は若干多め。

コラム3

三川

ミカワ

年齢 24歳

役割 特殊部隊（名称未定）隊員／補足・弁当屋店舗の存在は不明。

特徴 長めの茶髪、色の薄く、陶磁器を思わせる肌、グリーンの瞳、身長は170センチ、と高め。

田中に付けてもらった名前を気に入ってかは不明だが、なぜかミカンがいつもそばにある。

原付免許取得済み。ミカンマークのヘルメットに茶色のコートで田中に弁当を届けるのが目下のところ日課になっている。性格はテキトー。

バイクの荷台にある紙袋からわかるとおり、暇な時には「楽しいところ」に行ってる……らしい。

役割のとおり、軍人でもあるから、部隊の訓練にも参加している。

雑記 大変、お部屋を拝見してみたいメンバーである。

一応軍人だから、喧嘩もできる……

……かもしれない。

氷垣

ヒガキ

年齢 24歳

役割 田中の専属家政婦／他の人員のアシスタント

特徴 表情は静止したようで、話す時になってやっと人らしさが見える。家政婦のはずだが、口がシヴィアに悪い。

紺の長袖と膝下までの長さの紺のスカート。下には紺の長靴下を履いていて、身につけているものではエプロンとヘッドレスだけが白い。

もともと運動神経も良く、揉め事は苦手……………、という訳でもないらしい。

雑記 きっと、心のどこかでは、田中を慕ってくれていて……………きっと。

コラム3（後書き）

氷垣の印象が変わりましたか？

お知らせ

寒くなってきました。

ここではひょうきん者によりしく、と名乗らせていただいております。

突然ですが、一カ月ほど休ませてもらいます。

用事ですので、それが済み次第、更新できるか否かに関わらず、報告させていただきます。

毎週アクセス数を見て思い出しております。

はじめ僕はウキウキしつつ投稿しながら、

このまま誰にも認められずに終わるのでは、と思いつつポイントばかり見ていました。

文才には自信はありません。でも、かつて同級生だった友人の「前の書いた小説が読んでみてえ」の一言を思い出すと同時に、この自分が考えた世界をこの世に読んでみたくなり、こうして投稿するに至りました。

今では、ユニークアクセス数を見ていて思います。

僕は恵まれている、幸せ者だ、と。

これからも、一月ほど後になりますが。

ひょうきん者に……………、

よるく！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7727x/>

能力名は T.N.K.

2011年11月24日10時54分発行